事　務　連　絡
平成３０年７月９日

各　都道府県アレルギー疾患担当課　御中

厚生労働省健康局
がん・疾病対策課

避難所等におけるアレルギー疾患を有する被災者への対応について

今般の平成30年７月豪雨により被災され、避難生活を強いられている被災者の健康管理に、発災直後からご尽力いただいており、感謝申し上げます。

避難生活が長期化する中、避難所等で生活される被災者の健康を守るための対策が、より一層重要となってきます。

特に避難所では、多数の被災者に限られた種類の食品を一律に提供せざるをえないなど、通常時に比べ著しく制限された環境となっています。被災者は、そこで長期にわたり生活することを余儀なくされるため、アレルギー疾患を有する場合、特段の配慮が必要となります。

つきましては、別添１「災害派遣医療スタッフ向けアレルギー児対応マニュアル」により、保健師など避難所等で医療に携わる方へアレルギー児への対応を再徹底するとともに、別添２「災害時のこどものアレルギー疾患対応パンフレット」と別添３「アレルギーのこどものためにポスター」により、避難所で生活される被災者等に対し、アレルギー疾患患者に対する正しい理解を促し、未然の事故の防止に協力をいただける環境を構築することができるよう積極的な情報提供をお願いします。

照会先
厚生労働省健康局がん・疾病対策課
電　話：０３－３５９５－２１９２
ＦＡＸ：０３－３５９３－３２９３
担　当：貝沼・磯

＜別添１＞

災害派遣医療スタッフ向け

アレルギー児対応マニュアル

- 気管支喘息（吸入ステロイド薬 用量対応表）
- アトピー性皮膚炎
- 食物アレルギー

日本小児アレルギー学会

喘息

喘息発作時対応

- 発作強度に合わせた治療
- 必要によって酸素投与（SpO_2 95%以上を目標に）
- 基本はβ_2 刺激薬吸入（吸入手技に注意、20分毎に評価）

	所見		対応		
発作強度	呼吸苦	SpO_2	酸素吸入	β_2刺激薬吸入	補液[2] ステロイド投与[3]
小発作	なし～軽度	96%以上	−	単回吸入 or 内服[4]	−
中発作	あり	92～95%	要	反復吸入 3回まで20分間隔	β_2刺激薬吸入に不応時
大発作 呼吸不全	強い発作のサイン[1]	91%以下	要	反復 3回まで （20分間隔）	β_2刺激薬吸入と同時に （医療機関へ搬送考慮）

1. 強い発作のサイン:チアノーゼ、意識レベル低下、強い肩呼吸や陥没呼吸、横になれない、話すのが苦しい
2. 初期輸液（ソリタT1、ソルデム1、生食など）:乳幼児 50～100mL/時間、学童 100～150mL/時間
3. プレドニン 0.5～1mg/kg/日 分2～3 あるいは デカドロンエリキシル or リンデロンシロップ 0.5mL/kg/日 分2
4. 内服β_2刺激薬（6歳以上）:メプチンミニ（25μg） or ブリカニール（2mg）1錠/回

乳幼児における吸入

- ネブライザーがあれば、β_2刺激薬 [メプチン吸入ユニット（0.3mL）1A or ベネトリン吸入液 0.3mL] ＋ インタール吸入液 1A（or 生食2mL）を吸入
- ネブライザーがなければ、図のように紙コップなどで工夫してエアー製剤（メプチンエアやサルタノールエア等）を吸入する

喘息発作後対応

- 帰宅の目安（喘鳴・呼吸苦の消失、SpO_2 97%以上）をクリアしたら、帰宅時の処方をする
- 帰宅後の注意を伝える

帰宅時の処方

β_2刺激薬	発作が再燃した時のために3～4日分処方	●吸入薬：朝夕　1吸入ずつ（自宅や避難所では1日4回まで） ●内服薬：朝夕　1錠ずつ ●貼付薬（ホクナリンテープ等）：　1日1回24時間貼付 3歳未満 0.5mg、3～9歳未満 1mg、9歳以上 2mg ＊貼付薬と内服薬は併用しない、吸入薬の頓用は内服薬あるいは貼付薬使用中にも可
ステロイド内服	発作再燃の可能性がある場合、3日分処方	●プレドニン 0.5～1mg/kg/日（上限 30mg/日） 分2～3 ●デカドロンエリキシル or リンデロンシロップ 0.5ml/kg/日（上限 15ml/日） 分2
吸入ステロイド薬		●既に処方されている場合 →製剤毎に力価が異なるため「吸入ステロイド薬 用量対応表」を参考に処方する ●電動ネブライザーを使用していたが、災害等で使用できなくなった場合 →乳幼児ではエアー製剤に、学童以上ではエアー製剤 or ドライパウダーに変更

吸入ステロイド薬　用量対応表

<吸入ステロイド薬>

	低用量	中用量	高用量
ドライパウダー定量吸入器(DPI)			
フルタイドディスカス50	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回	1回4吸入 1日2回
フルタイドディスカス100	×	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回
フルタイドディスカス200	×	×	1回1吸入 1日2回
パルミコート100μg タービュヘイラー	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回	1回4吸入 1日2回
パルミコート200μg タービュヘイラー	×	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回
アズマネックス100μgツイストヘラー*	×	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回
アズマネックス200μgツイストヘラー*	×	×	1回1吸入 1日2回
加圧噴霧式定量吸入器(pMDI)			
フルタイドエアロゾール50	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回	1回4吸入 1日2回
フルタイドエアロゾール100	×	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回
キュバール50エアロゾール	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回	1回4吸入 1日2回
キュバール100エアロゾール	×	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回
オルベスコ50	1回2吸入 1日1回	1回4吸入 1日1回	1回8吸入 1日1回
オルベスコ100	1回1吸入 1日1回	1回2吸入 1日1回	1回4吸入 1日1回
オルベスコ200	×	1回1吸入 1日1回	1回2吸入 1日1回
吸入液			
パルミコート吸入液0.25mg	1回1吸入 1日1回	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回
パルミコート吸入液0.5mg	×	1回1吸入 1日1回	1回1吸入 1日2回

*小児における適応なし

<吸入ステロイド薬+長時間作用性β_2刺激薬>

	低用量	中用量	高用量
ドライパウダー定量吸入器(DPI)			
アドエア100ディスカス	×	1回1吸入 1日2回	×
アドエア250ディスカス*	×	×	1回1吸入 1日2回
シムビコートタービュヘイラー*	×	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回
加圧噴霧式定量吸入器(pMDI)			
アドエア50エアゾール	1回1吸入 1日2回	1回2吸入 1日2回	×
アドエア125エアゾール*	×	×	1回2吸入 1日2回

*小児における適応なし

日本小児アレルギー学会災害対応ワーキンググループ

アトピー性皮膚炎への対応

1)炎症を抑える

→ステロイド外用薬　1日2回塗布

- 顔面と陰部はⅣ群
- その他の部位はⅢ群(ひどければⅡ群)

ステロイドの強さ		主な商品名（五十音順）
強	Ⅰ　群	ジフラール、ダイアコート、デルモベート
	Ⅱ　群	アンテベート、シマロン、テクスメテン、トプシム、ネリゾナ、パンデル、ビスダーム、フルメタ、マイザー、リンデロン DP
	Ⅲ　群	アドコルチン、エクラー、ザルックス、フルコート、プロパデルム、ベトネベート、ボアラ、メサデルム、リンデロン V
	Ⅳ　群	アルメタ、キンダベート、ケナコルト A、リドメックス、レダコート、ロコイド
弱	Ⅴ　群	プレドニゾロン

＊軟膏の使用量

成人の両手掌分の
面積の皮膚に塗る

2)かゆみを抑える

→抗アレルギー薬(抗ヒスタミン薬)の内服

＊濡れタオルなどによる皮膚の冷却(乳幼児では低体温に注意)

3)スキンケア

→皮膚をきれいにする、保湿剤を外用する

- 保湿剤を乾燥した部位に1日数回塗る
- シャワーなどで石鹸を使って皮膚をきれいにし、速やかに外用薬(ステロイドや保湿剤)を塗布する
- 十分な水量が確保できない時には、ウェットティッシュやおしりふき(アルコール成分なし)を用いる

＊保湿剤:ワセリン、プロペト、ヒルドイドなど

アナフィラキシーへの対応

1）アドレナリン（ボスミン、あるいはエピペン）を大腿部中央の前外側に
　筋注ボスミン　0.01ml/kg　最大量：小児 0.3ml、成人 0.5ml
2）仰臥位、下肢挙上
3）突然の体位変換を避ける
4）必要により酸素投与（10L/分）
5）アドレナリンの効果が乏しい場合には
　① 5-15分間隔で同量のアドレナリン筋注を繰り返す
　② 急速輸液（生食 or 乳酸リンゲル液を最初の10分間で10～20ml/kg）を併用

＊抗ヒスタミン薬やステロイド薬には速効性なし
＊β_2刺激薬吸入は喉頭浮腫（嗄声、犬吠様咳嗽）に効果なし

参考　エピペンを所持する患者がエピペンを使用するタイミング（下記の1つ以上の症状があれば）

消化器症状	・繰り返し吐き続ける	・持続する強い（がまんできない）おなかの痛み	
呼吸器症状	・のどや胸が締め付けられる ・持続する強い咳込み	・声がかすれる ・ゼーゼーする呼吸	・犬が吠えるような咳 ・息がしにくい
全身の症状	・唇や爪が青白い ・意識がもうろうとしている	・脈が触れにくい、不規則 ・ぐったりしている	・尿や便を漏らす

日本小児アレルギー学会

災害時のアレルギー食対応

誤食を防ぐための指導

- 非常食や炊き出しには、アレルギーの原因となる食物が混入している可能性があることを伝える。
- 加工食品を食べる前には、原材料表示（鶏卵、牛乳、小麦、ソバ、ピーナツ、エビ、カニは、微量の含有でも必ず表示されている）を確認するよう伝える。

アレルギー対応食品の配布

- アレルギー食材を配布する取り組みがある場合には、患者に紹介する。
- 牛乳アレルギー患者用粉ミルクは、牛乳アレルギー児に優先して配布する。
- アルファ化米は、米アレルギーでなければ食物アレルギーの患児でも食べられる。ただし、五目ご飯等もあり、原材料表示には注意する。

日本小児アレルギー学会 災害対応ワーキンググループ

委員長

足立　雄一（富山大学医学部小児科）

委　員（五十音順）

赤坂　　徹（もりおかこども病院）
池田　政憲（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児急性疾患学講座）
今井　孝成（昭和大学医学部小児科学講座）
大矢　幸弘（国立成育医療研究センター生体防御系内科部アレルギー科）
小田嶋　博（国立病院機構福岡病院）
勝沼　俊雄（東京慈恵会医科大学附属第三病院小児科）
寺本　貴英（寺本こどもクリニック）
南部　光彦（天理よろづ相談所病院小児科）
二村　昌樹（国立病院機構名古屋医療センター小児科）
松井　永子（まつおかクリニック）
松井　猛彦（村立東海病院小児科/荏原病院小児科）
三浦　克志（宮城県立こども病院アレルギー科）
森澤　　豊（けら小児科・アレルギー科）

委　員・監　修（五十音順）

日本小児アレルギー学会前理事長
近藤　直実（平成医療短期大学/岐阜大学）

日本小児アレルギー学会理事長
藤澤　隆夫（国立病院機構三重病院）

2015.7

＜別添２＞

災害時のこどものアレルギー疾患対応パンフレット

日本小児アレルギー学会

平成 29 年 11 月改訂

はじめに

災害が起こったとき、被災者の中でよりつらい思いをされるのは何らかの病気をもたれている方々です。日本小児アレルギー学会は小児のアレルギー疾患に対する医療と研究を推進し、健康なこどもの育成に寄与することを目的に活動している学会ですが、災害時には、アレルギー疾患（ぜんそく、アトピー性皮ふ炎、食物アレルギーなど）をもつこどもたちのサポートをさせていただくべく、「災害時のこどものアレルギー疾患対応パンフレット」や「災害派遣医療スタッフ向けのアレルギー児対応マニュアル」を発行し、発災時のアレルギー対応食品供給体制づくりなどを行っています。

「災害時のこどものアレルギー疾患対応パンフレット」は2011年の東日本大震災をきっかけに作成されたもので、これまで避難所（熊本大地震）や災害に備えた講習会などでご利用いただいてきました。しかし、作成からすでに6年が経過し、アレルギー疾患を取り巻く環境も変化してきましたので、このたび、改訂版を発行することにいたしました。以前のものは、疾患ごとに保護者、周囲の方、行政の方向けに分かれていましたが、今回は疾患ごとに1枚にまとめ、行政担当者向けも1枚とし、より使いやすいようにしています。そして、新たに家庭での薬剤や食品などの備蓄について主治医と相談するために、「非常時に備えて」も用意しました。

日頃から災害に備えて、災害時には避難所などで手元において、このパンフレットをご活用いただければ幸いです。また、避難所などで掲示できる、わかりやすい啓発ポスターも同時に作成しましたので、ご利用ください。

本学会のホームページから無料でダウンロードできます（http：//www.jspaci.jp/）。

日本小児アレルギー学会
災害対応委員会
平成29年11月

災害対応委員会（パンフレット作成時）

	委員長	
	足立　雄一	富山大学医学部小児科
	執筆委員	
ぜんそく	三浦　克志（副委員長）	宮城県立こども病院アレルギー科
アトピー性皮ふ炎、非常時に備えて	二村　昌樹	国立病院機構名古屋医療センター小児科
食物アレルギー	今井　孝成	昭和大学医学部小児科学講座
ポスター	本村知華子	国立病院機構福岡病院小児科
	委　員	
	池田　政憲	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児急性疾患学講座
	伊藤　浩明	あいち小児保健医療総合センターアレルギー科
	大矢　幸弘	国立成育医療研究センター生体防御系内科部アレルギー科
	小田嶋　博	国立病院機構福岡病院
	勝沼　俊雄	東京慈恵会医科大学附属第三病院小児科
	高橋　豊	KKR札幌医療センター小児科
	南部　光彦	なんぶ小児科アレルギー科
	森澤　豊	けら小児科・アレルギー科
	理事長	
	藤澤　隆夫	国立病院機構三重病院

日本小児アレルギー学会
〒110-0005　東京都台東区上野1-13-3 MYビル4階
電話：03-6806-0203　FAX：03-6806-0204　Email：office@jspaci.jp

災害時アレルギー対応

ぜんそくのこどもへの対応

いままでと違う環境で生活をしていると、ぜんそく発作が起こりやすくなります。このような悪化を防ぐために、以下のようなことを心がけましょう。困ったときは、避難所や行政の担当者に相談しましょう。

ぜんそく発作の引き金（原因）になるものを避けましょう。

■チリダニ（寝具やホコリの中にいます）、動物（犬、猫など）、煙（たばこ、たき火、蚊取り線香など）、がれきからの粉塵など。

（対策法）・マスクやきれいなタオルを口に当てて、吸わないように防ぎましょう。
・そのような場所に近づかない、または、移動しましょう。

発作の予防薬を毎日続けましょう。以下の場合は要注意です。医師に相談しましょう。

■予防薬がなくなったり、少なくなった場合

■予防薬を毎日続けていても、せき込んだり、発作をくり返す場合

■電動の吸入器を持っていても、

①非常電源を使わせてもらえない場合（優先的に使わせてもらえるように相談しましょう）。

②電源がない場合（エアゾール製剤の吸入薬に変更して、スペーサーという補助具を使うことで電源が不要になります。また、スペーサーが手に入らないときには、紙コップの底に穴を開けるとスペーサーの代わりになります）。

発作が起きたとき

■発作が起きたら、まず水分をとらせて、息をゆっくり、深くするように声をかけてください。発作時の薬（吸入薬や内服薬）を使い、もたれかかる姿勢で休ませてください。それでも、苦しくて何度も目を覚ます、座り込んで苦しそうにしているなどの症状があるときは、医師の診察が必要です。

災害時のこどものアレルギーに関する相談窓口（無料）
▶メール相談：sup_jasp@jspaci.jp

日本小児アレルギー学会
ホームページ URL：http://www.jspaci.jp/

災害時アレルギー対応

アトピー性皮ふ炎のこどもへの対応

いままでとは違う生活環境で皮ふをよい状態に保つことは、とても難しいことです。シャワーや入浴についても困ったときは、避難所や行政の担当者に相談しましょう。

毎日のシャワーや入浴は治療の一部です。

石けんを使わないシャワー浴でも、ある程度の効果は期待できます。シャワーができない時は、熱すぎない程度のお湯でぬらしたタオルでやさしくぬぐったり、押しふきしましょう。

※市販のウエットティッシュやおしりふきは、香料やアルコールなどの成分で肌が荒れることがあります。肌の一部で試してから使いましょう。

ぬり薬は同程度～強めのものを使いましょう。

皮ふ炎が悪くなりやすいため、普段と同程度か、少し強めのステロイド入りのぬり薬を使ってください。
保湿薬は　市販品でも代用できます。

※市販の保湿薬は肌に合わないことがありますので、初めて使う時には肌の一部で試してから使いましょう。

ストレスや体調不良でも、かゆみはひどくなります。

かゆがる部分を、冷たいタオルなどで冷やしたり、遊びなどに集中させて気をそらしてあげると、一時的にかゆみが和らぐことがあります。皮ふ炎がひどいときにはステロイド入りのぬり薬をしっかり使いましょう。

※ぬれたタオルを長時間、直接肌に当てると、体が冷え過ぎてしまうこともありますので注意しましょう。

災害時のこどものアレルギーに関する相談窓口（無料）
▶メール相談：sup_jasp@jspaci.jp

日本小児アレルギー学会
ホームページ URL：http://www.jspaci.jp/

災害時アレルギー対応

食物アレルギーのこどもへの対応

困ったことがあったら遠慮せず行政の方等に相談しましょう。

◆原因食物を食べないようにしましょう

1）アレルギー表示を確認しましょう

“鶏卵・乳・小麦・ピーナッツ、ソバ、エビ、カニ”は使用されていれば必ず原材料に表示されるので、確認しましょう。しかし、これ以外の食物は必ずしも表示されないので、注意しましょう。

2）炊き出しで確認しましょう

原因食物が調理に使用されていないか、確認しましょう。しかし、大量調理なので少量混入は避けられないものと考えましょう。

3）食べ物をもらっても、家族などに相談してから食べるように教えましょう

善意で食べ物をこどもに与える場合があります。必ず保護者が内容を確認してから食べることを、こどもに教えましょう。

4）食物アレルギーがあることを周囲に知らせましょう

胸に「○○アレルギーあり」と書いたシールを貼るなどして、周囲の人に食物アレルギーがあることを分かりやすく伝えて、誤食事故を防ぎましょう。また、行政の方にアレルギーがあることを伝えて、支援が受けられるように早めに相談しましょう。

◆症状がでたら助けを求めましょう

以下の症状はすべて重い症状です。
一つでも現れたら、大きな声で助けを求め、早く医師に診せましょう。
本人のエピペン®があれば、速やかに打ちましょう。

全身の症状	唇や爪が青白い、脈を触れにくい・不規則、意識がもうろうとしている、ぐったりしている、尿や便をもらす
呼吸器の症状	のどや胸が締め付けられる、声がかすれる犬が吠えるような咳、持続する強い咳込み、ゼーゼーする、呼吸、息がしにくい
消化器の症状	繰り返し吐き続ける、持続する強いおなかの痛み

災害時のこどものアレルギーに関する相談窓口（無料）
▶メール相談：sup_jasp@jspaci.jp

日本小児アレルギー学会
ホームページ URL：http://www.jspaci.jp/

避難所におけるアレルギー対応（行政担当者用）

アレルギー患者は避難所などで困っています。
行政・管理者側から積極的に援助してください。
ぜんそく発作やアナフィラキシーを発症したときには、速やかに医療を受けられるようにしてください。

◆ぜんそく患者のために

・発作の原因（ホコリ、ダニ、ペット、煙、がれきなどの粉塵等）を吸い込むことを避けることが大切です。避難所における生活環境の管理・改善に配慮してください。
・発作を予防する長期管理薬を普段から使用することが大切です。電動の吸入器が必要な場合もあります。このような場合には、優先的に電源を使用できるようにしてください。

◆アトピー性皮ふ炎患者のために

・普段から皮ふを清潔に保つことが大切です。可能な限り早く、1日1回できれば石けんを使って、シャワーや入浴ができるようにしてください。
・その外見から、心ない言葉をかけられたり、偏見を持たれたりすることがあります。薬を塗るときや着替えるときに、周囲の目に触れない場所でできるようにしてください。

◆食物アレルギー患者のために

・アレルギー対応食やアレルギー用ミルクなどの支援物資を一般支援と区分し、患者に渡るように管理のルールを決めてください。
・アレルギー対応食は食物アレルギー患者に優先配布してください。
・炊き出しでは、鶏卵・牛乳・小麦などアレルギーの頻度の多い食材を使用しない調理をしてください。また、食べられるものを優先配布してください。
・心ない言葉をかけられたり、支援が受けられなかったりします。避難所における食物アレルギーの啓発・周知をしてください。

災害時のこどものアレルギーに関する相談窓口（無料）
▶メール相談：sup_jasp@jspaci.jp

日本小児アレルギー学会
ホームページ URL：http://www.jspaci.jp/

災害時アレルギー対応

非常時に備えて

災害などの非常時に備えて、普段から次のようなものを、非常用袋や防災セットと一緒に、いつでも持ち出せるようにしておきましょう。

※薬や食品には消費期限があるので、定期的にチェックしましょう。

ぜんそく

- □ **発作予防の薬　1 週間分**
  災害時でも、発作予防は大切です。
- □ **発作時の薬　1 週間分**
  環境が悪化するので、発作が起こりやすくなります。
- □ 可能なら **電気を使用しない吸入薬**
  (ドライパウダー製剤やエアゾール製剤)
  事前に練習しておきましょう。小さなこどもでは、エアゾール製剤にスペーサーも必要です。
- □

食物アレルギー

- □ **アレルギー対応食品**
  家屋倒壊の可能性を考えて、物置や車庫などに分けて準備しましょう。長期化に備えて 1 週間以上は備蓄しましょう。
- □ **エピペン®、抗ヒスタミン薬**
  普段携帯しているものをすぐに持ち出せるように保管場所を工夫しましょう。
- □

アトピー性皮ふ炎

- □ **ぬり薬　1 週間分**
  災害時は皮ふ炎が悪化しやすいので、普段使っていなくてもステロイド入りのぬり薬や保湿薬を準備しておきましょう。
- □ 可能なら **石けん**
  旅行用の小さなもので十分です。
  固形でも液体でも構いません。
- □ 可能なら **ビニール袋**
  少量の水と石けんを中に入れて振ることで、洗うための泡が作ることができます。
- □

その他

(必要なものを書き加えてください)

- □ **お薬手帳など処方内容がわかるもの**
- □
- □
- □
- □
- □

備蓄する薬剤や食品について、日頃から主治医と相談しておきましょう。

災害時アレルギー対応

アレルギーのこどものために

食物アレルギー、ぜんそく、アトピー性皮ふ炎などのこどもたちは、避難所などの食事や環境によって病気が急に悪化することがあります。

◆食物アレルギーのこどもがいたら行政担当者に知らせ、アレルギー対応食の支援を受けてください。

必要な除去食の内容（例：卵と小麦はダメ）やアドレナリン自己注射薬（エピペン®）を携帯してしていることなどの情報を行政担当者に伝えてください。

アレルギー用

◆アレルギーの原因となる食物、ほこり、ペットを避けましょう。

・支援食配給時、食物アレルギーのこどもに配慮をお願いします。
・炊き出しなどで調理に使っている食材を詳しく伝えましょう。
・マスクなどでほこり、煙、粉塵を避けて、ペットは室外で避難させましょう。

◆治療に必要な電源や水、スペースを優先して使用させてください。

・ぜんそく患者は電動の吸入器を毎日使用することがあります。
・毎日の清拭（ぬれタオルでやさしくぬぐうこと）やシャワーは、アトピー性皮ふ炎の治療に必要です。

◆ぜんそく症状やアナフィラキシーがあるときには、すみやかに診察を受けましょう。

・ぜんそく：強い咳き込みやゼーゼーする呼吸がある場合。
・アナフィラキシー：食後に、急に咳き込み始めたり、強い腹痛や繰り返す嘔吐がみられた場合。エピペン®はなるべくその場で使用しましょう。

災害時のこどものアレルギーに関する相談窓口（無料）
▶メール相談：sup_jasp@jspaci.jp

日本小児アレルギー学会
ホームページ URL：http://www.jspaci.jp/